

《展示活動》

オープンキャンパス特別展「没後 200 年記念 山形の算聖「会田安明」の軌跡」



[Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk](https://core.ac.uk)

ta University Academic Repository

1. 開催概要

主 催：山形大学小白川図書館・山形大学数学教育研究センター・山形大学附属博物館

開催期間：2017 年 8 月 11 日(金・祝)～9 月 29 日(金)

休 館 日：土曜、日曜、祝日(8 月 11 日(金・祝)、26 日(土)、27 日(日) は開館

会 場：山形大学小白川図書館1階

来 場 者：1,586 名

2. 経緯

会田安明(1747～1817)は山形県に生まれ、江戸で活躍した和算家である。当時の和算は関孝和を開祖とする関流が主流派であった。和算を志した会田であったが、行き違いがあり関流に入門をせず、独自に研究を進めた。1781(天明元)年頃からは 20 年余にわたって関流との論争を行った。また、会田はこの間に新たな和算の流派「最上流」を旗揚げするとともに、優れた弟子を多く育てて東北地方の和算の発展に大きく貢献した。

小白川図書館には、山大の元教員や和算家のご遺族から寄贈された、会田安明および和算に関する貴重な資料群がある。これまでも折に触れて展示などで紹介してきた。

2017 年 8 月 26、27 日に第 13 回全国和算研究大会および第 26 回東北地区和算交流研究大会が開催されることになり、主催者である山形県和算研究会より、理学部の協教授を介して是非とも小白川図書館の貴重な和算コレクションを公開してほしいとの要望があった。このため、オープンキャンパス(8月11日)特別展として本展を開催した。

3. 展示の概要

●会田安明の紹介

ご遺族から自叙伝『自在物談』および愛用の机、硯箱、算盤を借用

会田安明墓碑(会田先生算子塚)の拓本(個人蔵)

●小白川図書館の和算コレクション

会田安明の直筆の著作

『算法本源集起源』『算法天生法』『貫通術』『諸約混一術』『算法則円集』

『算法天生法指南』(小白川図書館志鎌文庫)

4. 関連企画「和算にチャレンジ」

会田安明の著作に出てくる和算に関する問題から、「初級編」「中級編」「上級編」の三つの数学問題をつくり、見学者の方に配布した。オープンキャンパスの当日には、正解者に小白川図書館のオリジナルグッズを渡した。100 名以上の正解者があった。

5. 小括

本展の開催により、和算には潜在的なニーズがあることがわかった。元々の愛好家はもちろんのこと、日本独自の数学という観点での、若い世代への働き掛けも有効である。また、小白川図書館が所蔵する貴重な和算コレクションについても今後とも周知を進めていく必要がある。



会田安明の紹介



関連企画「和算にチャレンジ」

《地域との協働》

市民との協働活動 ボローニャとの交流活動

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

1. 活動の経緯

2011年、山形大学は特別プロジェクト「井上ひさしの東北」の一環として「ボローニャの会」をスタートした。この勉強会の目的は、山形出身の劇作家である故井上ひさしの『ボローニャ紀行』を題材に、山形、そして東北の今後の街作りについて語り合い、行政などに対する市民からの提言をまとめていくことであった。その活動から発展して、実際にボローニャに赴き、現地の人々と交流する市民団体「チェントロ・ポルティコ研究会」が2014年に発足した。本団体はこれまで、ボローニャにおいては中学校の授業で俳句を初めとする日本文化を紹介したり、日本文化に関する講演会を開催してきた。また、ユネスコ創造都市ネットワークへの映画部門での加盟を目指す山形市を支援するために、音楽分野で加盟を果たしたボローニャの推進役であった、マウロ・フェリコーリ前ボローニャ市経済振興局長を招へいし、山形市長との対談のコーディネートし、山形市民に対してユネスコ創造都市の効果に関して普及啓蒙する活動などを実施してきた。その甲斐もあって、2017年11月に山形市は創造都市ネットワークへの加盟を果たした。

山形大学附属博物館が、市民団体が主催するボローニャとの交流活動に参加することになった契機は二つある。まず、本交流活動にはボローニャ東洋美術研究所が全面的に協力している。この研究所は、1987年、東洋美術とその文化の普及を目的とし、ボローニャ大学の教授やローマ国立東洋美術館長らが中心となって設立された。東洋文化関係の蔵書は約1万冊にのぼり、イタリアで最も充実した東洋関係の図書館としても利用されている。この研究所にはイタリアにおける有数の浮世絵コレクターのコレクションが寄託されており、所長であるアレッシンドロ・グイディ氏が調査を行っている。グイディ氏は日本美術に対する深い知識を備えているが、調査対象である江戸時代後期の役者絵や源氏絵などには、さまざまな比喻や、当時の社会状況においては制作者と鑑賞者に共有されていた情報基盤に基づいた表現がなされており、その解説作業は日本人研究者でも一筋縄ではいかない。本調査にボローニャの会を主催してきた山本陽史教授（専門：日本文学）が2015年より全面的に調査に協力することとなった。その山本教授から、日本美術史を専門とする筆者（佐藤）にも調査への参加が要請されたことが一因である。

もう一つのきっかけは博物館の地域貢献のためである。当館は山形師範学校の郷土室をルーツに持ち、大学博物館のなかでも長い歴史を有する館の一つである。創設以来、地域文化の伝承および普及啓蒙を使命としてかかげ、少ない事業費をやりくりして、特別展は1976年より、公開講座は1981年からほぼ毎年実施